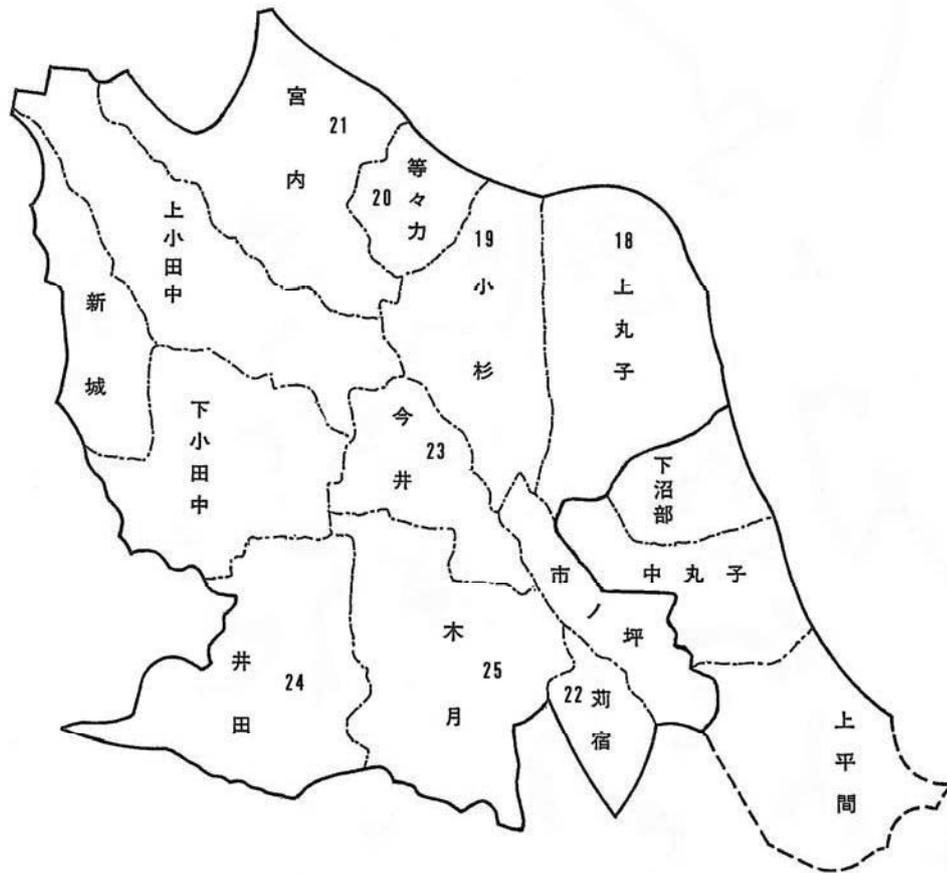


# 中原区



## 中原区のなりたち

古代から橋樹郡（たちばなぐん）に属していました。奈良時代の条里制耕地の跡と思われる区画が、小杉や今井方面にみとめられ、条里制からでた地名と思われる「いちの坪」があり、古くからひらけた地であるといえます。

平安末から鎌倉時代にかけては、この地には「稲毛庄」（いなげのしょう）という荘園がありました。荘園というのは、京都の上皇やその姫や藤原氏のような貴族たちの所有地のことで、現地の武士がその管理をしていました。その管理者として稲毛三郎重成の名が見られます。稲毛庄は今の宮内あたりを中心にして広がっていたようです。

江戸初期、二ヶ領用水が掘られて地域の稲作は格段にすすみました。工事を中心として小杉に「小杉陣屋」が置かれました。また「中原街道」が整備されて、駿府（すんぷ＝静岡市）や京への道として重要な役割をはたし、また、将軍の鷹狩のコースとしてもたびたび使われました。そのため小杉に「小杉御殿」が建てられました。

多摩川の南岸の沖積低地に広がるこの地域は、良い米が豊かに実る地ということでも有名でした。それで古くから「稲毛」と呼ばれたのです。毛というのは作物のことです。稲などの作物が豊かに実る地が稲毛なのです。用水が通り水に恵まれるようになると、一層、生産は上がります。「稲毛米」の産地として名が知られるようになりました。

江戸時代にはこの地域には上平間・中丸子・市ノ坪・苧宿・上丸子・小杉・宮内・上小田中・下小田中・新城・今井・井田・木月の 13 村がありました。

明治 22 年に村の統合が行われました。上丸子・小杉・宮内・上小田中・下小田中・新城の 6 村が合併して中原村がをつくられました。この名前は、中原街道が通っていることにちなむものです。中原は平塚市の地名で、中原御殿がありました。

また、市ノ坪・苧宿・今井・井田・木月・北加瀬の 6 村が合併して住吉村がつけられました。この名前は、新しい村を住み良い村にして行こうという、人々の気持ちから命名されました。（北加瀬村は大正の終わりに口吉村へ移ります。）上平間村と中丸子村の 2 村は、南の御幸村に入りました。

大正 14 年に中原村と住吉村は合併して中原町となり、昭和 8 年には中原町は川崎市に編入され、旧村は川崎市の大字となりました。

昭和 47 年川崎市は区制をしき、この地域に中原区を設けました。この名前は、中原町の名を引き継ぐものです。

## ○場所

中原区の東部中ほどに、上丸子の名がついた町が4町、新丸子の名がついた町が2町、丸子通の名が1町あります。これらは、江戸時代には「上丸子村」というひとつの村にふくまれていました。

## ○由来

「丸子」は中世までは「マリコ」と呼ばれていましたが、江戸時代以降「マルコ」の音に変わっています。「丸子」の地名の由来は分かっていません。古代前期、朝廷が置いた丸子部（マリコベ）の人々が住んだことにちなむと言う説が有力です。

「丸子部の仕事は川の渡しを管理すること」ということで、そういう人々が住んだことから、丸子の名でよばれるようになったものと思われます。

### エピソード



口枝神社

平安後期からの伝えが残り、鎮守口枝神社は市内でも歴史の古い神社です。江戸時代には、幕府から20石の朱印地を与えられる大きい神社でした。山王権現と云っていましたが、明治のはじめに口枝神社と改めました。戦争中には、米軍の空襲で境内に30発以上の焼夷弾が落ちたそうです。毎年正月7日に「おびしゃ」（お歩射）という的祭りが行われ、貴重な民俗行事として有名です。

## ○場所

中原区の西北に位置する地域です。北は多摩川に面し、西は等々力、東は上丸子、南は今井・市ノ坪に隣接します。現在、小杉・小杉 1～3 丁目・小杉御殿町 1～2 丁目・小杉陣屋町 1～2 丁目などの町がありますが、江戸時代にはそれらをふくむ地域が、小杉村というひとつの村になっていたのです。地域のまんなかを中原街道が通ります。

## ○由来

「コスギ」という地名の由来は定かではありません。地名研究では、スギ・スギは砂地をあらわす語と考えられています。コは接頭語でとくに意味はないと思われます。したがって「小杉」は、「多摩川沿岸低地の砂地のところ」ということになります。鎌倉時代から使われていた古い地名と思われます。

### エピソード

徳川家康は、天正 18 年(1590 年)に小田原北条氏を滅ぼしたあと、江戸に根拠地を置き、周辺の開発を進めました。この地域では「稲毛・川崎二ヶ領用水」を掘る大工事が行われました。家康からこの仕事を命じられた代官小泉次太夫(こいずみじだゆう)が、この小杉に陣屋をもうけ工事の監督にあたりました。14 年間彼はここにおいて用水工事を完成させたそうです。陣屋町の名はその陣屋がおかれたところの周辺の名です。陣屋があったところは、陣屋町 2 丁目の多摩川寄りの辺です。



当時の様子が分かる「宝暦村絵図」

徳川家康は慶長 8 年(1603 年)に江戸に幕府を開きます。家康・秀忠・家光の時代は、東海道がまだ整備されていなかったため、京都や駿府(静岡)への往復には中原街道の道筋を通りました。また鷹狩りを好み、この地の周辺にもたびたびやってきました。そして、旅の途中の休憩場所として小杉に仮りの御殿がつくられました。小杉の町もこの御殿を中心として、宿場の形をととのえていきました。

平塚の中原にも、中原御殿がつくられました。小杉からこの中原御殿をめざす道なので、この街道は中原街道と呼ばれました。御殿町の名は小杉御殿にちなむものなのです。御殿跡地は中原街道がカギ形にまがる地点の東がわ、御殿町 1 丁目の東部分です。

## ○場所

中原区の西北部に位置し北に多摩川の流れに面します。小杉と宮内の間の地域です。

## ○由来

「トドロキ」はドドメキ・ドウメキと同じで、川の音・水の音が鳴り響く様子からついた地名です。多摩川北岸に矢沢川という流れがあり、これがこの地で多摩川に合流します。



等々力緑地

その合流点での水音の轟きが地名になったものでしょう。

当地には等々力不動尊があり、その脇は等々力溪谷に面する崖になっています。ここに「不動の滝」という小滝がかかっている、その滝音が響くのでトドロキだと地元の人はいいます。しかし、それにしては不動の滝の滝音が小さく、チョロチョロという状態なので、トドロキ地名の由来とするには無理があります。

「等々力」という表記は、江戸時代の人の宛て字（あてじ）でしょう。戦国時代にこの地名は書物に現れますが、当時は「とどろ木」とか、「兎兎呂城」などと表記されています。

### エピソード

江戸時代はじめには荏原郡等々力村という名で、東京都の世田谷がわに属していました。この地は南側へ半島形に張り出していたのですが、たび重なる洪水と、江戸中期の田中丘隅(たなかきゅうぐ)の瀬替え工事(川の流れ道を替えること)により、半島形のつけねを多摩川の新しい流れが横断したので、この半島形の地域は切り離されて、等々力村の飛び地となりました。田中丘隅は江戸時代中期の農政家です。川崎宿本陣の家の出身で、多摩川や二ヶ領用水の改修ですぐれた功績を残した人です。

明治 45 年に東京府と神奈川県の間が改められ、この南がわの地域は神奈川県に入り橋樹郡(たちばなぐん)中原村に属することになったのです。その後、大正 14 年に中原町等々力、昭和 8 年に川崎市等々力、昭和 47 年に川崎市中原区等々力と変化しました。

## ○場所

中原区の西北の端の地域です。北は多摩川に面し、東は等々力・小杉、南は上小田中、西は高津区下野毛・北見方に隣接します。現在の宮内 1～4 丁目の地域で、江戸時代には宮内村と称していました。

## ○由来

平安時代後期（800 年前）から鎌倉時代にかけて、この辺に稲毛荘（いなげのしょう）という荘園（しょうえん）がありましたが、当地はその稲毛荘の中心地と考えられています。荘園というのは、その時代の「私有地」のことです。古くは公地だった土地を、平安時代になると次第に力をつけてきた「武士」の勢力が奪い取ったり、荒地を開墾したりして、自分のものにしていきました。こういう私有地が荘園です。

これらの武士は、国司からの圧迫をはねのけるために、京都の有力な貴族と結びつきます。土地の名義を中央貴族の名にして、自分はその家来というかたちをとり、実質的に土地を支配していました。



春日神社

鎌倉時代の初期、この稲毛荘の本所(荘園の領主)は藤原摂関家(せっかんけ)で、地頭は稲毛三郎重成(いなげさぶろうしげなり)でした。藤原氏の氏神「春日神社」を勧請(かんじょう=神様の御霊ミタマを分けて、新しい土地にまつること)して、この稲毛荘の鎮守としたのが春日神社です。この神社の周辺が「宮の内」とよばれ、やがて「宮内」の村名となったものと思われる。

## エピソード

時代が下るにつれて、武士階級の力は強まります。彼らは開拓に力をそそぎ、元の荘園の周囲に開発地をふやしていきました。そして、もともとの荘園の範囲を「稲毛本荘」(いなげのほんじょう)とよび、新しい開発地のほうは、「稲毛新荘」(いなげのしんじょう)と呼ぶようになりました。

その「シンジョウ」が、歴史の中でももともとの意味が忘れられ、表記も違う文字があてられ「新城」となりました。中原区が一番西にある新城地区の地名の由来です。

## ○場所

中原区の南部に刈宿があります。横須賀線と東海道新幹線にはさまれた地域です。

## ○由来

カリヤドという地名は全国に30箇所以上あります。これらの共通点をみると、みな古い街道に面していて、また大きな川を渡る前のところにあるのです。



平将門の宿り

カリヤドは、古い街道の「間の宿」（あいのしゆく）のようなところを指すのではないかと思います。間の宿とは、正規の宿場と宿場の中間にあって、途中休憩が必要なところに来れる実用的な宿場のことです。古い鎌倉街道が、多摩川にある「平間の渡し」にかかる手前に位置するので、そういう間の宿として成長した地、ということでカリヤド＝仮り宿と呼ばれたのではないのでしょうか。文字の表記はのちに変えられたものでしょう。

### エピソード

刈宿には、平将門（たいらのまさかど）にちなむ説話（伝えばなし）が伝えられています。平安時代前期、将門は武力で東国を支配し、自分のことを新皇（しんのう）と呼ばせました。これを「天慶の乱」（てんぎょうのらん）といいます。この時期の戦いの途中、彼はこのあたりを通ったといわれます。草原の広がるこの土地で日が暮れたので、彼は家来に命じて草を刈らせ、その草で仮寝の宿（かりねのやど）を作らせたといわれます。これが地名の由来だとされています。

草を刈ってつくったので「刈り宿」か、仮寝（かりね）の宿で寝たので「仮り宿」か、どちらかわかりませんが、いずれにしても地名の由来は平将門に発しているということです。

## ○場所

中原区のちょうど真ん中あたりに、「今井」の名がつく町が四つあります。今井上町・今井仲町・今井西町・今井南町がそれです。これらは、江戸時代から明治のはじめまでは「今井村」という一つの村でした。

## ○由来

今井というのはどういう意味なのでしょう。

地名研究では、「今」というのは新しいという意味で使われています。「井」というのは、湧き水や溜池（ためいけ）などをさすことが多いのです。

「今井」は結局のところ「新しい用水」という意味になるでしょう。今井は戦国時代以前にもう使われているので、中世のころ、「新しい用水ができて開かれた村」ということではないでしょうか。

昭和15年に耕地整理が行われ、新しく四つの町がつけられました。今井上町・今井南町は町をチョウと読み、今井仲町・今井西町は町をマチと読みます。

### エピソード

今井の地名は、全国に約50箇所ほどが存在します。

東北がわの境を「二ヶ領用水」が流れます。土地の人は「川崎堀」と呼びます。今井仲町と今井南町の境を「渋川」が南へ流れています。渋川は「余り水」を落とす排水路なのです。特に大雨の時に余分な水を矢上川に落とす大事なつとめをもっている川です。

今井西町の西がわのほうに、古い地名で「館跡」（やかたあと）というところがあります。伝えでは、中世にこの地を支配していた豪族の小宮氏の館があったところといわれています。さらにその西がわ、下小田中との境近くに「芝原」（しばら）という地名が残っています。シバラというのは村人の共同墓地のことで、昔は村に死者がでるとみなここに葬られました。大体が村はずれにつくられたのです。

## ○場所

中原区の中央、南寄りの地域です。現在は井田 1～3 丁目・井田中ノ町・井田三舞町・井田杉山町などが存在します。昔の「井田村」という村の地域です。

地域の中央を矢上川が東に向かって流れています。この矢上川の南がわは丘陵地になっていて、井田山と呼ばれています。川の北がわは、低く平なところで水田地帯でした。

## ○由来

井田の由来はどのようなことでしょうか。「井」というのは湧き水や溜池を指す言葉です。「田」(タ・ダ)という言葉は「処」(ところ)を意味する地名として使われています。

この二つをあわせて考えると、「湧き水の多いところ」という地名になります。実際に、井田山の北側のふもとには多くの湧き水が豊かに湧き出していて、地名と合っています。

### エピソード

現在の町名は、昭和 15 年の耕地整理のときつけられたものです。井田杉山町は杉山神社というお宮がここにあったことによる名前です。井田三舞町は、昔の字名(あざめい)の三舞(さんまい、三枚とも書く)によるものです。

サンマイとは、村はずれにつくられた村人の共同墓地のことです。こういう所には念仏三昧堂(ねんぶつさんまいどう)などが置かれて、人々がしきりに念仏をとなえたりしたので、「さんまい」と呼ばれたのです。三舞の文字はあとからの宛て字です。



今井中ノ町へ通じるブレーメン通り

井田中ノ町は、井田の中央部だということでつけられた名前です。井田山の西寄り、蟹ヶ谷との境に「東神庭遺跡」(ひがしかにわいせき)があります。古代前期の遺跡です。神庭というのは、古代の人の「神まつりをするところ」のことで、それを短くして今では「かにわ」と呼んでいます。そんなに遠い昔からここには人が住んでいたわけで、いまさらながら驚かされます。

## ○場所

中原区の東南の地域です。井田の東隣りにあたります。

木月の名がつく町として、木月大町(だいまち)・木月祇園町(ぎおんちょう)・木月伊勢町(いせちょう)・木月住吉町(すみよしちょう)があります。これらの町名は、昭和 15 年の耕地整理の時につけられたもので、木月の部分は町会名として 1~5 丁目の名がつけられました。これらの地は、昔は「木月村」という一つの村だったのです。地域のすべては平地で、南がわを矢上川が東に向けてながれます。中央部を渋川が南に向けて流れています。

## ○由来

地名の由来は定かではありません。木月という漢字はあとからのあて字と考えられ、キヅキの元の意味は「築く」という言葉からでた「築き」ということではないかと思われます。矢上川の岸辺の低い湿地帯に手をいれて、耕作地と集落(村)を「築き」あげた土地ということだと考えられるのです。鳥根県大社町に杵築(きづき)があり、大分県に杵築市(きづきし)があります。両方とも海岸の砂地を突き固めて、築きあげた土地ということで、意味は同じと思われます。

### エピソード

木月大町の名は、昔の字名(あざめい)で大耕地というところで、その大の字が使われました。木月祇園町は昔の字名の祇園橋からつけられました。その地域に祇園天王社があったことによります。木月伊勢町は、この地に小さな伊勢宮の祠(ほこら)があったことによります。木月住吉町は、明治のはじめに作られた住吉村の名が、大正のおわりになくなってしまっていたのを惜しんで町名につけたといわれています。



住吉神社

明治から大正にかけて存在した「住吉村」の総鎮守が「住吉神社」です。「元住吉」の駅名は、東横線ができた時住吉村はなくなった後だったので、「元」は住吉村の地ということでした。